

更級への旅

松尾芭蕉が歩いた

更科紀行街道の今・その26

131

治田神社

本当に子規は長楽寺に寄らなかったか？

NHKテレビドラマ「坂の上の雲（司馬遼太郎原作）」に登場する俳人正岡子規が東京帝国大学在籍中の明治二十四年（一八九一）、当地の善光寺街道を歩き、「かけはしの記」という紀行文にまとめたことを、シリーズ86で書きました。その紀行文の中で子規は、稱荷山（現千曲市稱荷山地区）から猿ヶ馬場峠（千曲市と麻績村の境）にかけて「路々に立つ芭蕉塚に興を催して歩いた」と書いているのですが、当時、街道沿いにあった三つの「芭蕉塚」のことを調べてみました。

▽喧騒の中の精進
塚とは、もともとはお墓のこと。芭蕉が眠るお墓はシリーズ130で紹介した滋賀県大津市の義仲寺にあるのですが、そこまですなかなかな行けない江戸時代の各地の俳人たちは芭蕉の供養と俳句精進のしるべにするため、芭蕉が詠んだ句を石に彫り、在任の地に建立するようにになりました。それが芭蕉塚です。「かけはしの記」によると、「子規は稱荷山宿で一泊し翌朝、まず治田神社境内にある芭蕉塚を見たと思われま

す。左下の写真です。刻まれた句は

何にこの師走の市にゆくからす
建立は「文化元年」とあるので一八〇四年、今から約二百年前です。芭蕉の死から百十年後で、建立日も芭蕉の命日に当たる「十月十一日」であるため、没後百十年の節目、芭蕉の追善供養を兼ねたものです。建立者は「信陽日々齋連中」と刻まれています。「信陽」とは信濃や信州と同様に

つて長野県一帯を指すときに使われた言葉。「日々齋」は治田神社神主の児玉喬明さん。「日々齋」は俳句を作るときの名前で、長楽寺の面影塚（シリーズ80を参照、今号後半でも触れます）の建立者、加舎白雄の門人でもあったようです。

日々齋さんとそのお仲間やお弟子さんたちが建立したわけですが、芭蕉のあまたある句の中からなぜ「何にこの」の句を選んだのか。治田神社の近くの稱荷山は江戸時代、善光街道の有力な宿場かつ物資の集積地でしたので、年末の師走は特に物や人、情報が集まり、大変な賑わいだったと思います。日々齋さんたちは、そうした喧騒とは一線を画し、心を平静に落ちつけて芭蕉が目指した俳句の道に精進しようというような気持ちでこの句碑に込めたのではないかと思います。

人間の背丈に相当する巨石です。芭蕉の作風を、俳句をやる人にとつてのお手本と宣言する意味合いもあつた面影塚の建立（一七六九年）から三十五年で、まだその余韻が残っていた時代です。日々齋さんたちは正面に「芭蕉翁師走塚」と彫っており、面影塚の正面にある「芭蕉翁面影塚」の塚名を強く意識した命名です。

▽姨捨まであと少し
次は「火打石茶屋」の芭蕉塚です。姨捨はこれからゆくか閑古鳥

茶屋とは江戸時代、街道を往来する人たちのために設けられた飲食がでる休憩スポット。「火打石茶屋」の呼び名は、カチカチとこすり合わせれば火花が出る、大きな火打石がそこにあることに由来します。屋号は「名月屋」。茶屋本陣とも呼ばれ、付近の茶屋の中で最も格式のある茶屋だったそうです。武水別神社（旧更級郡八幡村、現千曲市八幡地区）の祭典である大頭祭では、この茶屋の火打

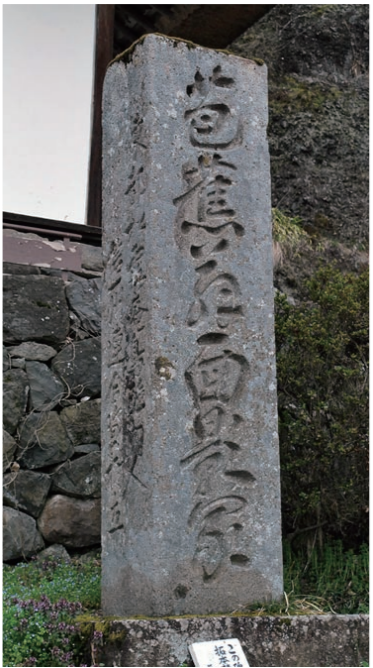
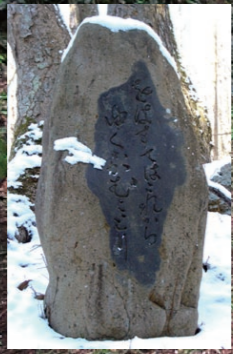
ち石から採火していた時代もあるそうです。最上部石の写真がその場所です。左側の巨石が火打石、上に載っているのが芭蕉塚です。今はあすま屋が建つた休憩所になっています。

この句は本当に芭蕉が作った句なのか疑われていますが、鏡台山から上る月や「田毎の月」で有名な姨捨は、まもなくの所であることをカッコウ（閑古鳥）の泣き声を聞きながら期待を膨らませている様子を詠んだ句だと思えます。写真の句碑は新たに作られたもので、子規が見たと思われる句碑（芭蕉塚は現在、茶屋を営んだ方のお宅（千曲市中原地区）の庭に移されています。

▽治田神社・長楽寺・火打石？
さて、最後の三つ目が長楽寺の面影塚です。実は子規の「かけはしの記」の中では長楽寺のことがまったく触れられていません。子規はあえて長楽寺を訪ねなかったという解釈が一般的です。姨捨の月があまりにも俳人の間

「路々に立つ芭蕉塚」に感興

何にこの師走の市にゆくからす



に知れわたり、「姨捨」を句に詠んだだけで何かありがたがるような空気が支配的になっていったため、「月並み」などと権威を皮肉の言葉も作り、文学としての近代俳句を打ちたてようとしていた子規には無視したい対象だった、というのがその理由です。

だとすると今号では取り上げられないのですが、子規は長楽寺にも立ち寄り面影塚を見た可能性も考え



発行 二〇一〇年 十二月四日
編集 さらにな堂
（代表・大谷善邦）
〒三九九・〇八二三
長野県千曲市大字若宮二一八四・六
（旧更級郡更級村）